

第 11 回 都市計画道路殿町羽田空港線ほか
道路築造工事に係る河川河口の環境アドバイザー会議

(令和 2 年 12 月 8 日開催)

主な意見、指摘事項と対応について

1. 環境対策の現況報告

意見・指摘事項	対応
<p><干潟表土仮置き状況></p> <ul style="list-style-type: none"> 令和 2 年 7 月 8 日の写真では草が生えているが、令和 2 年 11 月 19 日の写真では草がなくなっている。何もせずに放置した状態か。 	<ul style="list-style-type: none"> 7 月と撮影箇所が違う写真で 11 月は草が写っていないが、奥のほうはそのまま草が生えていました。
<p><濡すじ調査></p> <ul style="list-style-type: none"> 考察の表現で「多様な生態系の創出の場」ではなく「多様な生態群衆の創出の場」に修正して欲しい。 粒度組成にそれほど変化はないが、生物相が違うので、どれだけ地盤が下がり、沈んだ状態だったのかわかる様に地盤表記をお願いしたい。 生態系保持空間とは生息域として保全される場所であることから、干潟が多少減ったとしても、むしろ生物の多様性の生息場が増えたとポジティブに評価すべきである。 	<ul style="list-style-type: none"> 「多様な生態群衆の創出の場」に修正しました。 次回から地盤変化がわかる様に表記する方向で検討します。 ご意見ありがとうございます。今後の調査の参考とさせていただきます。

2. 令和 2 年度夏季・秋季定期環境モニタリング調査実施状況報告

意見・指摘事項	対応
<p><水質・水象></p> <ul style="list-style-type: none"> 図 1-4(1) R2.6.6~8 にかげ上層の DO がほとんど 0 mg/l になっている。下層で 0 mg/l になることはあるがむしろ増加し、上層のみ 0 mg/l なので何か心当たりはあるか。機械のトラブルだとしたら有り得ない結果が出ている。実証値だとしたら原因を突き止めるべき。このデータが出た理由を示さなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 浚渫工は施工しておらず、当時の計測状況としては定常状態でありました。計測データも確認しましたが、原因が特定できませんでした。おそらく計測機械のトラブルかと思われます。
<p><干潟地形></p> <ul style="list-style-type: none"> P4 橋脚周辺の地形変化データはあるか。吉野川だと各橋脚の前後、左右の流れの傾向もチェックをしていた。地形も戻ってきているので今後の参考としてそういった傾向も見た方が良く考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 本調査は干潟の形状変化を計測していますので P4 橋脚付近の調査結果はありません。P4 橋脚付近は作業船の稼働確認のため、不定期で深浅測量を行っており、堆積していないことは確認をしています。今後、供用後の川崎市のフォローアップ調査で確認していくか検討します。
<p><植物></p> <ul style="list-style-type: none"> 特になし 	<p>—</p>

意見・指摘事項	対応
<p><鳥類></p> <ul style="list-style-type: none"> ・P28 文章内にチュウシャクシギが多くと書いてあるが、図 4-3 の凡例と棒グラフの色が一致していない。凡例はあっているか。 ・シギ・チドリ類は橋梁によって最も影響を受けると思われるが、実際に通過を橋梁が妨げているのか？確認されたトータル個体がどのくらいの割合で橋梁を通過したのかを昨年度と比べると、橋梁が妨げになっているのか否かがわかると考える。 ・令和 2 年 9 月は全体的に確認例数も個体数が少なかったのか。トータル的に何がどのくらい減少したのかわかるように文章や表を工夫してください。 ・H30 年度のシロチドリ 65 羽、64 羽とあるが、これだけ確認できたのか。 ・シロチドリは全国的に減少傾向で、多摩川に 20 羽来ていたのがまた来るとは限らず、もともと少ないものを細かく解析するのめいかがなものかと考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・チュウシャクシギは春にしか確認されておらず誤記ですので修正します。棒グラフの表示がわかりにくいので修正します。 ・高度別の確認例数で集計していますが、年度による増減があることから、総数と割合で表示するように修正します。 ・表現方法について検討し、次回から修正します。 ・長時間観測していたのでダブルカウントになっていると考えます。 ・過去に少数でも確認されていたが、今回確認できなかったことからデータとして掲載いしました。
<p><魚類></p> <ul style="list-style-type: none"> ・凡例が多すぎてグラフが見づらい。いなかった凡例は削除するなど一般市民方が見て、一目でわかるように工夫をしてください。 	<ul style="list-style-type: none"> ・種数をまとめるなど見やすいように次回から修正します。
<p><底生生物></p> <ul style="list-style-type: none"> ・底生生物の増減を粒度組成の関連で整理している。それとは別に定点での調査だと標高が変わっているため標高もデータとして載せてほしい。例えば中州の標高が違えば塩分濃度も変わるのでそういった観点からも測定地の標高のデータも載せたほうがわかりやすい。標高で塩分濃度も予測できるので比較しやすいと考える。 ・表 6-2 の表が一番わかりやすい。典型種等も同じ測定地であれば各年トータルで表記してはどうか。平均値も推移もわかりやすいのではないか。 ・図 6-4 の見方がわかりにくいので表現を工夫すること。 ・図 6-4 のシジミの殻長組成について、もともと全体の確認個体が少ないものを測点ごとに割合を出すなど難しい。R2 春には稚貝 1 個しか確認できなかったが、地形変形を見て考えても、R2 秋では全体で 7 個、その内、稚貝、成貝も確認できた。稚貝、成貝が確認できたことは比較的シジミのサイクルが安定的にできていることが説明できるようにまとめてはどうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次回から標高データを記載する様にします。 ・次回から表記する方向で検討します。 ・縦軸は時系列で横軸が干潟の調査地点です。左から右に上流から下流ですが調査個所の平面図を載せるように修正するとともに、確認種数が少ないので総計でまとめる様に修正します。

意見・指摘事項	対応
<p><底質></p> <ul style="list-style-type: none"> ・図 7-1 1-C-2 で中州の粒度組成が R2 春から変わり始め、R2 秋には全く変わってしまっているが、なにか要因はあるのか。 ・特に要因がなければ、上流で浚渫をしているから何らかの影響があるのかと思われるのでコメントをして欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・R2 春までは中州の残存している測定地に歩いて行けたが、R2 秋は船で地点に行かざる得ない状況のため、実際の地点での従来の採取ではなく数m下流での採取になってしまいました。そのため、全く異なる性質になってと考えます。 <p>採取位置を変更したコメントを追記します。</p>
<p><コアマモ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし。 	—

3. その他

意見・指摘事項	対応
<p><仮設構台基礎杭の残置について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・河床面から最低でも 2m 深い位置で鋼管杭が残るとのことですかどの程度の深さか。 ・底生生物の分布最大水深は 2m 程度で、ハゼも 2m くらいは掘りますがおそらく影響はないと思います。物質としても鉄は害があるものではないので残置したとしても、多摩川河口の生物分布の生態系に影響はないと言えます。社会的な疑問としては最初から抜けないことをわかっていたのか。 ・技術的に泥の中で切ることができるのか。 ・資料を見る前は、洗掘されて基礎杭の天端が出てくることを心配していた。東京都側の水深が一番深いところを基準にし、さらに深いところなので、この河川の状況から考えて将来的にもそこまで自然に決することは考えられないので影響ないと考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・計画河床を A. P. -6.8m としているが、現在の浚渫深さが A. P. -2.5m であるので、そこから 6m 深いところになります。 ・当初の解析では撤去できるという結果であったが、抜けない要因は推定ではあるが粘性の高い粘性土が悪さをしたのではないかと考えています。 ・鋼管杭の中にある土砂を撤去し中にカッターを入れて中から切ることができます。鋼管井筒の撤去ですでに実施済みです。 ・ご意見ありがとうございました。
<p><築造部の埋戻し形状について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・埋戻しの形状の議論は鋼矢板を全て撤去することが前提での議論をしていたが、どの程度、どのように鋼矢板が残置されるのか。 ・埋戻し形状の比較 3 案のうち、着工時に作成した「干潟の保全・回復計画」に近い第 3 案でよいと考える。 ・自然というものは時事刻々と変化し、二度と同じ干潟の形状には戻ることはあり得ない。むしろこれからどのような変化をしていくのかをモニタリングすることが大切である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・当初の予定通り鋼矢板は全て撤去します。 ・方向性は第 3 案で埋戻しを進めさせていただきます。最終形状は埋戻し直前の深浅測量結果で決定します。 ・工事中のみならず、供用後も調査してまいります。